

「隋代古刹」の今昔と最澄入唐以前の天台宗の淵源

Sui Dynasty Now and Then, and the Origin of Tendai Buddhism before the Visit of Saichō (Japanese Buddhist Monk) during the Tang Dynasty.

繩手教真*

Kyousin Nawate

Abstract

This year in particular, there has been much discussion about many topics regarding the relationship between Japan and the People's Republic of China (RPC). A visit to Japan in May by Hu Jintao, President of the PRC, with issues such as food safety, Japan's rescue operations for the 2008 Great Sichuan Earthquake, and the 2008 Beijing Olympics in August with 204 participating nations and regions are still fresh in our memory. Unfortunately, many problems between the two countries still remain unresolved despite a long history of mutual exchanges. In June 2007, I had an opportunity to go and pay homage at temples on Mt. Tendai (Tendaisan) and Putuo (Fudasan) which are regarded as sacred mountains in Chinese Buddhism. This thesis will review my visit to China and provide evidence for the cultural bridge built by many predecessors who overcame great hardships. In particular, this thesis will focus on the famous and not so famous priests who contributed significantly to the development and propagation of Tendai Buddhism. These priests, who went to China to study Buddhism, as well as those who visited Japan from China, will be remembered with respect and gratitude.

キーワード：中国天台山，道璿から鑑真，無名僧への追念，天台宗の系譜，
最澄ゆかりの寺院，唐招提寺

*鈴鹿高等学校教諭・本学非常勤講師、日本史 (History of Japan)

(序) 波濤を越えて

昨年(2007)は聖徳太子が小野妹子に「国書」を託して隋の煬帝のもとに派遣(607)してから1400年、日中共同声明によって国交回復35周年の節目にあたる。そこで日中交流1400年記念国際シンポジウム「住吉津より波濤を越えて」—遣隋使・遣唐使がもたらしたもの—が5月大阪市の住吉大社(吉祥殿)において日中の学者や研究者を招いて開催された。会場の住吉大社は神功皇后の三韓出兵のときに神威が現れたとして筒男三神つつのおの和魂にぎみたまを祭ったのを創祀とされる社殿である。古くから海の神、航海の神が鎮座されているという由来から遣隋使、遣唐使の一行が海上安全の祈願をしたといわれている。そしてシンポジウム2日目には吉祥殿において東大寺長老の森本公誠導師のもとに神仏合同の慰霊祭も行われた。国際会場として歴史的意義も深く、なかなか粋な計いでもあった。今回のシンポジウムは単に両国の友好にとどまらず、今後アジアや世界平和の繁栄にも資するにふさわしい国際イベントであった。基調講演者の王勇氏(浙江大学教授)はこれまでも東京大学、愛媛大学をはじめ皇學館大学などで研究発表や講演をされている大変親日的な学者である。現在も浙江省中日関係史学会会長も兼任されており、日本古代史、仏教史が専門であり特に「鑑真」に関する著書や論文が多い。とりわけ唐僧鑑真の渡日動機の仮説については道教との関連から独自の視点で考察もされており興味深いものがある。王氏の論考については後述触れることにする。

さて、国際シンポジウムから1ヵ月後の6月に私は天台真盛宗(総本山大津市坂本)の五天会創立20周年記念行事として天台宗の母山である天台山「国清寺」をはじめ、伝教大師(最澄)修学の「龍興寺」、中国四大仏教聖地のひとつである「普陀山」等への巡拝と研修に参加する機会があった。「五天会」という組織は僧侶と壇信徒によって結成された仏教研修と親睦を中心とした自由で会則等もないグループである。中国天台宗の総本山である国清寺への団参はこれまでも10数回実施されており国清寺の住持をはじめ僧侶方とも大変親密で友好的な関係が構築されている。また山西省最大の仏教聖地である五台山にも過去数回の巡礼が行なわれている。五台山については日本高僧の玄昉、靈仙、円仁、奄然、成尋ともゆかりの深い仏教聖地である。そのほかタイ、カンボジア、ベトナムなどの東南アジアの仏教圏にもたびたび訪れ意欲的な巡拝活動が続いている。今回の研修は僅か1週間程の行程であったが、その途次、杭州において王勇氏と歓談することができたことは大変有意義でもあった。この時にも話題はいつしか「鑑真来日」におよび彼の熱弁と笑顔が記憶に新しい。

1. 古代中国仏教と南都六宗

諸子百家の多彩な思想や学派は春秋戦国時代のおよそ500年余にわたる激動期において王や諸侯たちの貴族社会や知識人の間に溶けこみ精神生活を支えると同時に国家統治や国

富策として積極的にとりいれられた。西域を経て中国社会に仏教が伝播するのは後漢（洛陽）の永年 18 年（75 白馬伝説）とされるが、この間の初期仏教の潮流は主として仏典の翻訳やその研究であり教線領域においては限定されており比較的早くから経済発展の進んでいた交易都市とその周辺部の一部民族の間という極めて限られた範囲に浸透していた程度である。その後仏教が老荘思想を媒介として中華文明の世界にゆるやかに根をおろしはじめるのは 4 世紀後半の南北朝時代である。即ち、この間華北においては西域の亀茲出身の仏図澄（?～348）や鳩摩羅什（344～413）によって仏典漢訳や中国社会の広域にわたって布教につとめている。一方江南の地では東晋の求法僧法顕（377 ごろ～422 ごろ）が戒律の原典を求めてインドにおもむき訳経につとめたり彼の著した「仏国記」によってインド哲学、科学、文学あるいは仏教儀式などを紹介し老荘思想に異国の新鮮な刺激をあたえるなどその活躍がみられた。また国家の莫大な財政と保護を受容して造営された華北の敦煌、雲崗、竜門の石窟寺院はいずれも当時の仏教遺跡として代表的なものであり、洛陽や建康の都では仏寺も林立してきている。同時にこの時代においては後漢以降の道教が中国古来の神仙思想と融合し民間の間に広く普及し、とりわけ北魏においては道教が国教化されるに及んで一時は廃仏運動もみられたが、儒教、道教そして仏教のいわゆる中国三教は対立しながらも一方ではたがいに支えあったりしながら人々の習俗や思考の型として影響をあたえていた。我が国にも 6 世紀にはいると道教や道家の思想、あるいは儒教や医、暦など進んだ知識は五経博士を通して伝来しており、日本人の思考や文芸面に大きな影響をもたらしている。さらに同じ頃、仏教も朝鮮半島から伝来しているので少し触れておくと仏教公伝については「日本書紀」（壬申年 552 年）と平安期に成立した「上宮聖徳法王帝説」や「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」（共に戊午年 538 年）の二説があるが戊午説が今日の学界では有力となっている。私伝については平安末期成立の「扶桑略記」（皇円）が参考となるが、恐らくそれ以前（522 年）にも渡来人による受容が推察されるが文献的史料は不明である。

「あやひとくらつくりのすぐり繼体天皇即位十六年壬寅大唐の漢人案部村主司馬達止、此の年の春二月に入朝す。即ち草堂を大和国高市郡坂田原に結び、本尊を安置し、帰依礼拝す。世を挙げて皆云ふ。是れ大唐の神なりと。」

繼体天皇即位十六年（522 年）

いずれにしても仏教伝来はその後、在来の民俗宗教や神道と融合しつつ本地垂迹、神仏習合思想とあいまって貴族社会の中で大いに華ひらくことになった。一方、もともと中国やインドに生まれた仏教理論の学派や教理研究である南都六宗は朝廷から篤い保護をうけながら国家の鎮護仏教として天平期における京師の仏教教学の地位や学問所として特別の扱いを受けることになった。これら南都仏教を代表する東大寺（華嚴宗）、法隆寺や興福

寺（法相宗）、大安寺（三論宗）、唐招提寺（律宗）などの大寺院があげられる。しかし一方ではこれら大寺院への莫大な財政援助は国家にとっても大きな負担でもあり、中には貴族と結びつきながら政治に介入する寺院や僧侶も出現し本来の学問仏教という性格から乖離して墮落現象もみられた。のちの桓武朝による平安遷都の背景には、これら仏教勢力による政治介入の弊害を遮断することが最大の要因のひとつでもあった。同時に南都六宗の教理研究が国家仏教として奈良朝の仏教界で大いに華を咲かせていた頃、中国江南地域では天台宗が広がりを見せてきており、その影響は遠く日本にまで及んでくることになった。戒律の師として来朝してきた道璿やバラモン僧菩提僊那らの渡来集団である。来朝僧は伝律授戒や我が国の文化に大きな影響を及ぼしながらとりわけ奈良仏教界に新風を吹きこみ貴族層や朝廷、寺院に色濃く影響をあたえていくことになった。その後8世紀末頃になると朝廷では長く続いた天武系の皇統にかわって光仁・桓武朝が成立し道鏡によって混乱をした仏教政治の肅正と律令政治の再建をめざして都は山背長岡京に遷都されさらに延暦13年（794）には平安京に再遷都が続き内政の安定と国家財政の確立を中心とした積極的な政治改革が続く時代でもあった。なおこの頃には仏教界においても後述の最澄、空海を祖師として新潮流が胎動しはじめてきている。都をはなれ厳しい戒律のもとで山林修行をする天台・真言宗はこれまでの南都の諸派から激しい反対を受けながら神秘的な密教をとりいれ加持祈禱による現世利益や国家安穩の功德を高揚させこれまでの奈良仏教とは異なる教義や実践で皇族や民衆から広い支持を得ていくことになった。

2. 学問僧の光と影 — 「僧行賀の涙」 —

遣唐使の任命は舒明天皇（630）から宇多天皇の寛平6年（894）発遣中止まで前後19回の多きに及んでいるが、この間任命だけで中止されたものや「遣唐客使」という性格の回数を除けば実質的には264年間を通して13回と数えることが正確である。また時代によってもその目的、規模、海路など種々の相違がみられる。その中でも8世紀初頭の文武朝から孝謙天皇期に至る約半世紀間は唐では玄宗治世の盛唐期（開元の治）にあたり遣唐使もこの間4度にわたって入唐している。仏教や密教の移植にとどまらず美術、建築、医薬、学芸など多岐にわたる盛唐文化が天平期に及ぼした影響は極めて大きかった。

木宮泰彦教授の名著「日華文化交流史」には遣唐学生、学問僧（留学生）^{るがくしょう}一覧が詳述されているがその延数は史籍に名を残しただけでも約250人にわたっている。また不幸にして往復の海上や唐において没した者も約20人が確認されており、唐文化の受容はまさに遣唐使に随従した多くの有無名の留学生や学問僧さらには異国からの来朝者たちが不屈の精神と幾多の辛惨をのり越えてもたらした結晶でもある。彼ら入唐求法の篤い遣唐留学生や学問僧は貴族階級の子弟をはじめ南都の大官寺の中で特に優秀な人物が銜賞され、さらに学問僧には数人の従僧や行者が伴うことが多かった。留学期間も文武朝以前には一般に

20年、30年と長期に亘ることが通例であったが、平安期にはいとその期間は著しく短縮され1年から2年となっていた。またこの間には唐に長期滞在して学問をする留学生と遣唐使と共に往復すべき還学生（請益生）という新呼称もでき滞在期間や目的によって区別され広く使用されている。「続日本後紀」

最澄が天台教学を南都学匠に講じ桓武天皇より還学生に任命されたり空海の留学生はその例でもある。

この様に遣唐使の一团は単なる外交使節でなく我が国の律令体制確立と発展に必要な新知識や文物さらには宗教儀式等を直接移植する大きな目的があった。人員についても100人程度から盛唐時代においては500余名を以て構成されることもありその規模が大きくなるに従って国家使節としての儀容も整ってきている。大使、副使、判官、録事の四等官が使節団の管理責任者であるが、時には大使の上に遣唐押使、あるいは執節使が置かれる時もあった。人員には知乗船事、都匠、医師、陰陽師、訳語、画師、船工、鍛工、鑄生、細工生、音声生、そして派遣の中でも最も重要な地位を占めていたのが留学生や留学僧であった。また、暴風雨や海賊に備えて下級船員の水手、射手の必要人員も存在している。

さて、鑑真研究の第一人者である安藤更生博士は鋭い指摘をされている。（「天平の薨」をめぐって）

「業行が熱中して写した龐大な経巻が『秘密部』すなわち密教の経巻や¹⁾儀軌類であって若しこれらの経巻が海難のために覆没の厄に遭わなかったら日本は弘法大師以前にすでに正式な密教を持ち得たであろう。・・・」

本稿はその視点のひとつに異境の地において若い求法者たちが無償の情熱と心血をそそぎ明けても暮れても夥しい経文の書写に没頭する実直な姿を浮かびあがらせる中で不幸にして日本国土に生かすことができなかつた多くの学問僧たちに謝恩と追念をあらためて捧げるものである。

僧行賀もその一人であった。「僧行賀の涙」は天平期の留学僧を描いた歴史物であり、「天平の薨」に先だつて世に出された井上靖氏の仏教伝来物である。行賀は3歳年上の仙雲と天平勝宝4年（752）遣唐大使藤原清河の第10次遣唐船で入唐した留学僧であった。高い求法、向学心が認められ唐国において天台および法相の宗儀を修学するのが彼の任務であった。爾来、在唐31年間ひたすら孤独な僧坊で写経に没頭し、彼の写し得た経疏類は500余巻にも及んだ。その後日本に向かう渤海国の船に乗って行賀が肥前松浦郡^{たちばなのうら}橘浦に漂着したのは延暦2年（783）であり翌3年6月には經典類を携行して奈良興福寺に入っている。しかし無事帰朝を果たした行賀には次なる運命がたちはだかった。東大寺の僧明一による試問に対坐するが僧行賀は何を訊かれても答えることができず眼をつむったまま涙が頬をぬらすだけであった。

異境の地で長年に亘ってただひとり憑かれたように写経に没頭し孤独の世界で生きた姿

であった。

「久しく歳月を経て、学殖^{ふせん}膚^ふ淺^{せん}、涙する僧行賀にくだされた試問の一喝であった。
その後行賀は人と会わず興福寺に籠り「法華經弘疏贊略」10巻の筆をとり
延暦10年には別当に就くが享年75歳で寂している。

「僧行賀の涙」より

また、後述の普照と共に戒師招請の重任を負った栄叡の衰弱死にも息がつまる。入唐9年目にしようやく揚州大明寺において鑑真に謁し渡航懇請の目的は達するがその途次、天平勝宝元年端州竜興寺で高熱と衰弱で客死している。「唐大和上東征伝」に時の様子がわずかに残っている。

「栄叡師^{えいぜい}奄然として遷化す。大和上^{たいわじょう}哀慟悲切なり。喪を送りて去る」
これだけの記述である。

わずかに史籍に名をとどめ史上から影を没していった留学生や学問僧は多い。暴風雨による難破で溺死した者、南海の小島に漂流し島人に殺戮された者、その他行方不明や病臥による客死などその人員数はこれまでとりあげた学才、文名、あるいは仏教史に不朽として名を残し、歴史上の表舞台で活躍し後世に名を刻んだ員数に比べればおそらくその数は計り知れない。僧行賀の晩年は法相宗六祖のひとりにかぞえられ興福寺で示寂しているが遣唐使一行の随員の多くは水手、射手にいたる多くの^{いのち}生命の代償として天平文化に鮮やかに開花させたのである。

3. 第9次遣唐使と大仏開眼会

欽明朝に百済国から仏教が正式に伝来してから、我が国は聖武天皇の治世に至っても未だ僧侶に正式な資格を授与できる授戒師の制度は整っていなかった。(2)三師七証)

天平5年(733)第9次遣唐使派遣の大命は唐から授戒師僧を招聘することであった。この間仏教公伝からすでに200年の歳月が流れている。

朝廷により³⁾節刀を授与された遣唐大使多治比広成以下副使の中臣名代の総員500余名が分乗した四隻には戒師招請の使命をおびた若い留学僧栄叡、普照がいた。同年8月に蘇州に到着した一行は唐の内政事情から一時長安を離れて東都洛陽で政務を執っていた玄宗皇帝に朝貢の儀を無事に果し、あわただしく翌6年10月には第8次遣唐使に随伴して留学していた吉備真備、僧玄昉らを収容して蘇州を出帆し^{たねがしま}帰国の途についた。しかし四隻は暴風雨に遭遇し船列をくずし大使広成の第一船は同年11月多禰島に漂着し翌年3月平城京に入京するが、第三船、四船は南方に流され消息を絶った。その後第三船は^{こんろん}崑崙国(林邑)に漂着し生存者は僅か4名となっていたが天平11年12月渤海国を経て出羽国から奈良の都に入った。蘇州出帆からすでに5年の歳月がたった。副使名代の第二船は菩提

僊那（バラモン僧）唐僧道璿、林邑僧仏徹、波斯人李密翳^{りみつゐ}そして留学僧道鏡らが乗船しており第一船より遅れて天平8年5月に薩摩国に帰着し大宰府から入京をしたのは同年8月であった。第9次遣唐使の帰国はこれまでに例がないほどの異国からの僧俗集団でもありのちの大仏開眼会をはじめ天平文化に寄与した功績は大きかった。菩提僊那、道璿らの多くの来朝僧は大安寺に止住し華嚴経の諷誦^{ふじゆ}や密教作法等を弟子達に教授している。なお、菩提僊那に関する研究では「靈山寺と菩提僧正記念論集」所蔵の「婆羅門菩提僧正とその周辺」（堀池春峰氏）と「流沙を渉り来唐・来朝した菩提僊那」（井上薫氏）の論文に詳しいが唐僧道璿とあわせて特に大仏開眼会の絡みから多少整理をしておく。菩提僊那の入唐については「大安寺菩提傳來記」「三宝絵詞」の史料においても今なお不明な点が多い。ただ、平安期に入り中国五台山（山西省）の文殊信仰が円仁著「入唐求法巡礼記」によって紹介されるとその絡みからインド僧菩提の入唐目的もこの文殊靈蹟巡礼にあったという示唆は以前から出ている。来朝については大使広成、副使名代らの招請とされるが直接には学問僧理鏡による懇請により実現されたものである。

道璿は許州（河南省）の人で出家前の姓を衛^{ゑい}と書いた。洛陽大福先寺の定賓について律蔵を学び華嚴寺普寂からは南山律と天台学を修学している。鎌倉期の東大寺学僧凝然が著した「律宗瓊鑑章^{けいかん}」では「戒律、華嚴、台教、北禅その幽旨を窮める」とその学殖、博学をたたえている。来朝については榮叡、普照が定賓について⁴⁾具足戒をうけた大福先寺での出会いがあった。大福先寺は当時仏典漢訳の中心寺院でもあり道璿はこの名利において若手では群を抜く学識豊かな学問僧であった。帰朝時は35歳の壮年期にあり菩提より3歳上である。来朝後は菩提と同じく大安寺西唐院に住しながら律蔵や道宣（南山律宗）の「行事鈔^{しやう}」を講じている。弟子も多く最澄の師である行表や文豪淡海三船らがいる。天平勝宝4年（752）4月の大仏開眼会には菩提は開眼導師、道璿は咒願師^{しゅがん}に補せられ仏教傳來後最大の盛儀の大役を果たしている。道璿と天台学の関係については後述するが、彼の晩年は吉野比蘇寺に退隠し天平宝字4年（760）に入寂。時に59歳であった。同年、菩提も世を去り（57歳）、さらには榮叡、普照を入唐せしめた隆尊も遷化している。奈良仏教界の指導的立場に立った人物たちの凋落でもあった。

「東大寺要録巻第二」（供養章）に伝える大仏開眼会の抜粋を付記しておく。

皇帝敬請す

菩提僧正

四月八日を以て齋を東大寺に設け、膚舎那仏を供養し、敬しみて辺眼を開元せんと欲す。

朕が身は疲弱にして起居するに便ならず、

其れ朕に代って筆を執るべき者は和上一人のみ。

仍って開眼師に請ず。 乞ふ、辞する
 ことなく扮受せよ、 敬白。

皇帝敬請す

隆尊律師

四月八日を以て齋を東大寺に設け、華嚴経を講ぜんと欲す。

其の理は甚深にして彼の旨は究め難し。

大徳の博聞多識に非ざるよりは、

誰か能く方広の妙門を開示せん。

乞ふ、辞することなく扮受せよ、 敬白。

咒願大安寺道璿律師 請書右の如し
 都講景静禅師 請書右の如し

大仏開眼会の準備が進む中で菩提を迎接したり、とりわけ大仏造立の勸進に功のあった大僧正行基が天平勝宝元年（749）、菅原寺で没した。享年 82 歳であった。また、この年は端州で栄叡が物故した年でもある。大仏開眼会の執行にあたり天平勝宝 3 年 4 月には詔を以て菩提は僧正、良弁を少僧都、道璿、隆尊が律師に直任され勝宝 4 年 3 月に開眼供養会の勅書が下された。

ここに日本、インド、中国の三国高僧による開眼盛儀の主役が整い開眼導師菩提僧正は衆僧沙弥あわせて 1 万人を招いた中で開眼筆を以って仏眼に点睛をくわえた。

4. 鑑真上陸の秋妻屋浦 “山川異域風月同天”

授戒師招請の使命を負った栄叡、普照がはじめて鑑真和上に出合うのは入唐より 9 年後の天平 14 年（742）揚州大明寺であった。「唐大和上東征伝」は時の様子を次のように記している。

天宝元載冬十月、時に大和上揚州大明寺に在り、衆僧のために律を講ず。栄叡、普照師大明寺に至り、大和上の足下に頂礼して具に本意を述べて曰く、「仏法東流して日本国に至る。其の法有りと雖も、法を伝ふるの人無し。本国に昔聖徳太子有りて曰く、二百年後に聖教日本に興らむと。今此の運に鍾る。願はくは和上東遊して化を興せ」と。

大和上答えて曰く、「昔聞く、南岳の恵思禅師、遷化の後、生を倭国の王子

に託して仏法を興隆し、衆生を済度すと。また聞くに、日本国の長屋王は、
 仏法を崇敬して千の袈裟をつくり、来たして、この国の大徳・衆僧に施し、
 その袈裟の縁上に四句を繡着しゅうちやくして曰く、

“山川域を異にすれども風月は天を同じうす。”これを仏子に寄せて、共に
 来縁を結ばん、と。此を以て思量するに、誠に是れ仏法興隆有縁の国なり。
 今我同法の衆中、誰か此の遠請に応へ、日本国に向ひて法を伝ふる者有る
 や」と。

時に衆黙然として一の対ひとりふる者無し。

しばらくして僧祥彦しょうげん有り、進みて曰く、「彼の国は太遠く、性命存じ難し。
 滄波そうはびょうまん森漫、百に一たびも至ること無し。・・・」と。

和上曰く「是法事のためなり。何ぞ身命いずくんを惜しまむ。諸人去かざれば、我
 即ち去くのみ」と。

鑑真時に 55 歳に達していた。

天平勝宝 5 年 (753) 11 月、蘇州黄泗浦から鑑真、思託、普照 (栄叡は端州で客死) の
 一行を乗せた第二船が挫折や漂流の辛苦をのり越えてようやく 6 度目に日本の土を踏んだ
 のは同年 12 月 20 日の薩摩国秋妻屋浦の漁村であった。この漁村は現在の南さつま市西南
 端に位置して坊津町秋目の地にあたる。奇岩の点在する秋目湾の崖上には鑑真上陸の記念
 碑が建立されており、地元ではこの地を「入唐道」と呼んでいる。秋妻屋浦上陸は鑑真渡
 日の決意からすでに 12 年の歳月が流れ 67 歳の高齢に達していた。また鑑真はこの時には
 すでに両眼は失明していたといわれている。

第 9 次遣唐使船で来朝してきた菩提僊那や道璿よりおよそ 20 年後の上陸である。

阿児奈波島 (沖繩)、益救島 (屋久島) を経由し太宰府から難波を経て入京したのは翌
 年の 2 月 4 日である。鑑真一行は朝廷による盛大な出迎えや慰労の宴があわただしく続く
 中、1 年前に厳修された大仏開眼会の様子を東大寺別当良弁によって聴聞したり、この時
 がはじめての出会いとなる道璿の歓待もうけている。

同年 3 月には勅使吉備真備によって鑑真に授戒伝律一任の詔が宣下された。

東大寺大仏殿の前に戒壇が築かれ、さっそく聖武上皇、光明皇太后、孝謙天皇以下 400
 名余に授戒が執行された。また翌天平勝宝 7 年には大仏殿の西に常設の戒壇が築かれ、そ
 の後筑紫観世音寺、下野薬師寺にも戒壇が設けられ、ここに天下三戒壇の制が成立するこ
 とになった。

5. 最澄以前の天台宗の源流

鑑真は律僧であると同時に中国天台の法脈を受け継ぐ天台学の高僧でもある。鑑真研究
 の第一人者である安藤更生博士は綿密な考証をもって天台宗の伝来は「鑑真にはじまっ

た」と論断されている。この指摘については学界の通説となっており異論はないが鑑真より 20 ほど早く伝律授戒師として帰朝してきている前述の唐僧道璿によってもすでに天台学の種蒔きははじまっていた。先の王勇教授著「天台の流伝」から道璿と天台学の関連について整理しておく

①道璿の著した「梵網経注」三巻は、禅宗の教旨を説き明かすために、天台大師智顛の学説をひいて述べている。

②中国天台宗は純粋な教学を伝える国清寺の系統が重んじられており、兼学の傾向が著しい⁵⁾玉泉寺の系統が軽視されているが道璿、鑑真はこの系統につながっている。

③最澄以前に日本に伝播した天台学は玉泉寺系であり、道璿の天台教学はその弟子行表を介して最澄へと受けつがれていった。

本稿は天台の教学と教観（思想）の源流についてより鮮明に浮かびあがってきた鑑真将来の典籍類を根拠として天台学の伝播について論考したものである。

さて、鑑真を日本天台宗の祖師と仰ぐ根拠には鑑真一行が持戒堅固な律僧集団にもかかわらず多くの天台典籍を将来したことである。古くは前述した凝然の「三国仏法伝通縁起」にも初見されるが弟子の法進、曇静、思託、如宝、法載、義静などは天台宗にも精通し自ら天台沙門と称している。また鑑真をして恵思、智顛、灌頂、弘景につぐ天台宗第五祖として位置づけている。さらには若き鑑真就学中の 21 歳には長安實際寺において弘景（天台学兼学）より具足戒を受け律宗と天台宗についても直接にその教観を修学し戒和上の影響は色濃く染みこんでいたことは十分に推察される。加えて先の「日華文化交流史」において、木宮教授は「唐大和上東征伝」に依拠しながら鑑真将来の天台典籍に特に注目され恵思や智顛信仰と結びつけて日本天台学の源流とその開宗を鑑真集団と位置づけられている。鑑真が入京してきた時はすでに 67 歳の老境に達しており、道璿に比べれば我が国での教導期間は 10 年程であるが、その影響は伝律授戒制度の確立にとどまらず天台教学、さらには盛唐文化を限なく後世に伝播させた功績は極めて大きかった。鑑真自身は著述を直接残してはいないが日本天台宗の源流と流伝はまさに鑑真と高弟たちの帰朝が大きな軌跡の出発点と考えると良いだろう。鑑真の情熱はその後天平宝字 7 年（763）鑑真示寂後 4 年目に生誕した最澄に受け継がれ天台典籍の妙義が延暦 23 年（804）、御歳 38 歳の入唐以前から深く内包されていた。

次に鑑真将来の主要典籍をまとめると以下の通りである。

「天台止観法門」10 巻、「法華玄義」10 巻、「法華文句」10 巻、「四教義」12 巻、「次第禪門」11 巻、「行法華懺法」1 巻、「小止観」1 巻、「六妙門」1 巻

上記天台典籍のうち「行法華懺法」を除いて智顛大師の著述によるが、「法華玄義」「次第禪門」「六妙門」の 3 部については鑑真来朝より数年前にはそれぞれ国内での書写が残されているので初伝の典籍は主要 5 部ということになる。

鑑真示寂後は高弟の法進に東大寺戒壇院を管領させ、法載、義静、如宝の3弟子には唐招提寺あって戒律弘通に力を到さしめている。

その後平安初期に入り、比叡山延暦寺に大乘戒壇が建立され教界の主権が二分されるまで東大寺はここに日本仏教界の総本山として名実共に不動の地位を確立していった。また、唐招提寺においては天台教学（章疏）が盛んに講ぜられたことを「唐招提寺縁起略集」は明らかにしている。

「從三年（天平宝字）八月一日、初講讀四分律拵疏等、
又玄義、文句、止観等、永定不退軌則、
兼和上（鑑真）天台教観、稟法進僧都、如宝少僧都、
法載、思託等和上化、講天、代々相承
而于今不絶、桓武天皇追慕和上鑑真眞之
嘉徳、重以莊嚴於遺基、構五間四面
精舎一字、安彌陀三尊、自百濟国渡
勅於此寶殿講玄義、文句、止観
永代不絶、」

さて道璿、鑑真のもたらした天台典籍や教学は幸運にも日本の土を踏むことができ、その後ひとり歩きをはじめめるが幾多の海難覆没によって夥しい經典類や仏像、仏具等が一瞬のうちに海底に沈み藻草と消えたことも計り知れない。そこには悲痛な喪失感と絶望の鳴咽だけが波濤に呑まれていくだけであった。くり返しになるが悠久な歴史の流れの中で遣唐使に関与した僧俗集団や帰化来朝僧が我が国に及ぼした情熱と功績は深大であった。その中でとりわけ先徳たちに随伴しながら苦楽を共にし影から主業、研鑽を扶助した無名の構成員たちの御霊に鎮魂の追念を捧げあらためて顕揚の意義を見出したいと考える。換言すれば彼らの存在意義は鷗尾を支えている心柱の礎石にも似ている。やがて世が天平から平安朝に遷る中で天台教観の奥義が最澄に受け継がれ比叡の庵に結ばれてくるが、若き最澄には入唐以前からすでに将来されていた天台典籍やその妙義について通じておりすでにその素地は染みこんでおり、ここに胎動してきたものである。即ち日本天台宗の源流はまさに地中の礎石周辺から時を越えて着実に表流してきたものといえる。願わくば甍に聳える鷗尾から十方世界に遍照の光明を放ち志半ばで倒れていった多くの随員たちに功德と重ねて追善祈念を表するものである。

6. 揚州の花「瓊花」

天平の面影をもっともよく遺しているといわれる唐招提寺は今から1200余年前の天平宝字3年（759）鑑真和上によって創建された。新田部親王家の旧宅地を賜り律宗の道場として伽藍全体が今日の姿に整ってきたのは鑑真没後より約半世紀を要している。その後

鎌倉期の文永 7 (1270)、元亨 3 年 (1323)、江戸期には元禄 6 年 (1693) そして明治 31 年 (1898) の改修が文献や鴟尾、鬼瓦の銘文から知られている。そして現在唐招提寺では明治の改修よりおよそ 100 年にあたる平成の大修理が平成 13 年より金堂の大棟から鴟尾を下ろして進められている。伽藍の中心である金堂はここに創



(図-1) 瓊花

建以来、はじめてすべてが解体され屋根構造を継承させながら平成 21 年の修復完了を目ざし鑑真和上の遺徳と無言の教誡を後世に残すべく平成の大解体保存修理事業が匠たちと人々の篤い思いの中で完成を目前に急ぎ進められている。

さて、律宗総本山の唐招提寺の境内は最盛期には四町四方ともいわれその伽藍は「海東無双の大伽藍」と称された。元禄期の貞享 5 年 (1688) 春、俳聖芭蕉 44 歳の時、吉野紀行の途次、唐招提寺に詣で鑑真和上像を拝して「若葉して御目の雪拭はばや」と詠みその名句は旧開山堂前の句碑に刻まれている。和上坐像が安置されている御影堂の土塀に沿って、うっそうとした木立の中を進むと、その周囲は静かなたたずまいの濠をめぐらした小塚がある。境内の静寂さに包まれている墳丘には高さ 3 メートルほどの宝篋印塔がひっそりと立っている。天平宝字 7 年 (763) 5 月この地で示寂された鑑真和上の眠る御廟である。廟前にはかつて 12 の塔中が建ち並んでいたが今は鑑真和上の故郷揚州から鑑真和上 1200 年遠諱修行にあたり、昭和 39 年 (1964) 日中親善のために贈られてきた額紫陽花に似た白い花卉の「瓊花」が晩春から初夏にかけて咲きほころび伝律授戒のため身命をかけて来日した盲目の唐僧鑑真を偲ばせている。

7. 聖地天台山「国清寺」の今昔と求法僧

聖地天台山は浙江省台州市にある。華頂峯 (1138 メートル) を主峰として霧深い諸山峯が連互する地勢は多くの峡谷や瀑布、自然洞穴を形成させており早くから道教の霊場あるいは神仙の聖地として人々の理想郷として開かれた。風光明媚な天台山を訪れた李白 (701~762) もこの地を訪れ詩を詠じた。

「天台は四明 (山) に隣し、華頂は百越に高し。

門は標す赤城の霞、楼は棲す滄島 (仙人) の月。

高きに憑って遠く登覧すれば、直下に溟渤を見る。

雲は垂れて大鵬翻り、波は動いて巨亀没す。」

「天台眺望」

天台山は古くから道士、僧侶ばかりでなく歴代の皇帝、墨客、文人たちが訪れ参拝をくりかえしてきた霊山でありインドの靈鷲山^{りょうじゆせん}、のちの日本比叡山とともに「法華経」の三霊山の一つとして求法僧の憧れの修行道場でもあった。もとは、神仙の住む霊山として神仙伝説（劉阮返棹伝説^{りゅうげんへんとう}）や道教関係の霊場として開かれた天台山が仏教の聖地として大きく様変りをしてくるのは三国時代以降である。西晋から東晋時代に入りいよいよ仏教の浸透が広まり、ここに敦煌出身の曇猷尊者^{どんぎゆう}（竺曇猷^{じく}）の入山が最初の開山者とされている。また書聖として著名な王羲之^{おうぎし}は道教の信仰者でもあるがこの時天台山で曇猷と面会したといわれている。高僧支道林、支曇蘭や定光禪師なども古くから草庵を結び住山修行している。この間の約 200 年が天台山における仏教の聖地としての胎動期にあっている。

その後天台山を仏教の聖地として堅固な基礎を築いたのが智顛（538～597）である。智顛についての詳しい事跡は省略するが、光州大蘇山の南岳恵思禪師に入門し、陳の太建 7 年（575）38 歳で弟子 20 余名と天台山仏隴^{ぶつろう}に入山している。「智者大師列伝」は時の様子を記している。

「陳の太建 7 年秋 9 月に。初めて天台に入る。
定光禪師在りて山居すること 30 歳 （中略）
仍ち定光の草庵に宿る （中略）
仍ち定光の住せし所の北峯に伽藍を創立す。」

定光禪師は石橋庵^{しやくきょうあん}に山居すること 30 年、智顛の入山 2 年前より来山の予言をしていたともいわれ手篤くもてなした。

智顛の入山した 仏隴は天台山の中心聖域で最も神聖な霊地であり智顛（天台大師）ゆかりの寺院が密集している。古くから「この地に遊ぶ者は多くの仏像を見る」といわれている。著者もこの地の中心寺院である修禪寺、真覚寺、高明寺を参拝しているので、その概略を付記しておく。

修禪寺は智顛在山の 10 年間の主要道場であり天台宗の祖源の歴史を有していたが後述の国清寺完成後は衰退し唐代には禪林寺と改称され、さらに宋代には大慈寺と改めている。唐の貞元 20 年（804）日本天台宗の最澄は義真（通訳）を伴ってこの仏隴に登り仏隴寺の行満和尚から天台学また禪林寺の脩然^{しゆくぜん}（脩然^{しゅうぜん}）から当時盛んであった牛頭禪^{ごずぜん}を受けている。現在は放生池と大殿の基礎が残るが大慈寺跡として知られている。

真覚寺（智者塔院）は智顛の肉身塔が安置されている寺院として著名である。隋の開皇 17 年（597）11 月智顛入滅後、この遺言の地に埋葬された。「智者大師肉身塔」は六面二層高さ約 6 メートルの白石製の霊廟である。最澄はこの地において「日本国求法斎文十七首」（台州録）を読み謝恩の法要を行っている。また 50 年後の円珍も大師像に詣で読経

礼拝し感激の涙を流したことが記録に残る。平成元年（1989）日本天台宗は比叡山開創1200年を記念して真覚寺東南区に『般若心経』1200巻を納めた「報恩写経塔」を建立している。

高明寺の開創は智顛が営んだ浄居に基づくといわれているがその年次は不明である。「天台十二道場」の一つであり国清寺に次いで大きく真覚寺より山道3キロ下方の仏隴谷底に位置している。唐代には寺院としての格式も整ってきている。宋代には浄明寺と改称されるが現在は旧号に復されて今日に至っている。大雄殿、鐘楼等は文化大革命（1966～1976）の動乱期に破壊されたが新たに復興された。主尊は釈迦（中）、文殊（東）、弥勒（西）の三尊で本尊裏側の普陀落浄土の観音像は莊嚴である。以上のごとく天台山には仏隴の寺院をはじめ天台大師ゆかりの十二道場があった。かつては72カ寺を数えたとも伝えられているが現在では天台山総道場の国清寺を中心として香を焚き供花をそえて法燈を継承しているのは9カ寺である。そのほとんどが廃寺となったり旧跡不明である。

1) 天台山を訪れた求法僧

天台山は五台山（山西省）とともに日本の僧侶にとって未知の国でもあり憧憬の聖地でもあった。とりわけ平安期から鎌倉時代の約500年の中で求法者たちが苦難の旅をのり越え天台山を訪れた時はまず国清寺に詣り智者肉身塔の真覚寺を参拝し、つづいて仏隴寺から修禅寺に詣るコースが一般的であった。これらの中である者は天台教理の研究や典籍類の書写に長年心血を注いで多くの将来品を我が国にもたらした。その功績と影響についてはこれまでも再々述べてきたところである。次に入唐僧として天台山を訪れた著名僧をあげると以下の通りである。

最澄、義真、円珍、円載、寂照、念救等がいた。また、いわゆる「入唐八家」と称される高僧には空海をはじめ円行、常暁、円仁、恵運、円珍、宗叡、そして最澄の八人である。ただ入唐八家には数えられるが空海と円仁の二人は天台山には登ってはいない。

遣唐使の廃止後、五代を経て北宋時代になると宋船を利用して渡宋する僧侶や従僧も多く、無名僧も含めれば多くの求法者たちが天台山を目ざし入山している。また平安中期から鎌倉期まで下れば日延、奄然、重源、栄西、俊芿、成尋、明全、道元、徹通義介らの高僧たちがあげられる。いずれも鎌倉新仏教の成立と発展に貢献し新風を吹き込んだ中心人物である。そして、彼らを常に扶助して支えた無名の従者たちの存在もここでも忘れ去ることはできない。

2) 隋代古刹の「国清寺」

国清寺は天台山の南山麓にあり中国でも最も著名な古刹である。隋の開皇17年（597）天台智者大師の遺言を受けた時の隋晋王広（後の煬帝）^{しんおうこう}によって智顛没後4年をへて仁寿

元年（601）に完成している。最初は「天台寺」と呼ばれていたが大業元年（605）煬帝に寺額「国清寺」を請い下賜されて現在の寺名となっている。

“この寺成らば国清からん” という

定光禪師の夢告に基づいて名付けられたという。

唐代に至って寺運は盛んとなり天台教義と修禪を求めて各地から求法者が集まり天台宗中興の祖である第6祖荊溪大師湛然の時には最も栄えている。鑑真も3回目の渡海途上に栄叡、普照らと参拝している。（天宝3年冬）

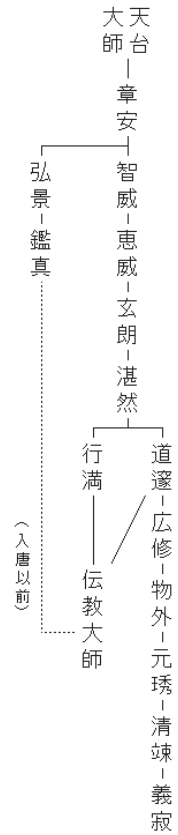
また最澄が訪れた貞元20年（804）には台州（臨海）の刺史陸淳に謁し湛然の弟子である修禪寺の道邃や仏隴寺の行満から天台の止観、教相を学び、密教については越州（紹興）龍興寺の順暁や国清寺の惟象から受け翌年には道邃を戒師として沙門27人とともに菩薩戒を受けている。かくして最澄はわずか1年足らずで天台のみならず密、禪、戒の四宗を相承し、仏教典籍を携えて帰朝し比叡山を母体に日本天台宗の高揚と発展に寄与した。なお、最澄が天台山から将来した典籍類・書籍の部数（巻数）については一定していないが田村晃祐博士著「最澄」から主なものを整理すると以下の通りである。

- 「台州録巻頭」、「台州録後記」、「越州録」、「台州求法」、「略目録」、「法華部」、「止観部」、「禪門部」、「維摩部」、「涅槃部」、「雜疏部」、「天台随部目録」

その後国清寺は会昌5年（845）武宗の道教保護政策から廃仏令が出され多くの寺院破壊や仏教弾圧が起こるが16代皇帝宣宗即位によって廃止された。国清寺はこの時法難を受けるがこれを機に堂宇も整備、復興されている。大中7年（853）に円珍が訪れたのはその数年後である。

さらに国清寺は唐末の戦乱で2度目の破壊に遭遇し、多くの天台典籍を喪失するが、時の高僧徳韶による天台典籍の将来要請を我が国に求めてきている。これに応じて比叡山の僧日延が送使として典籍類を運んでいる。（周の広順3年953）

その後元代に入ると国清寺は衰微期となりこの間数回の朝廷下賜があり山門、雨花亭、方丈室、万工池など、多くの建築が行われている。また元末明初（14世紀中頃）には僧派が2派に分かれて争った時期もありこの抗争でも山門などの一部を残して悉く破壊されている。それ以後は明太祖の洪武10年（1377）、隆慶年間（1567～1572）、万曆29年（1601）など小規模修復は行われているが長期間再建することは出来ず清の復興期を待たなければならなかった。



(図-2)

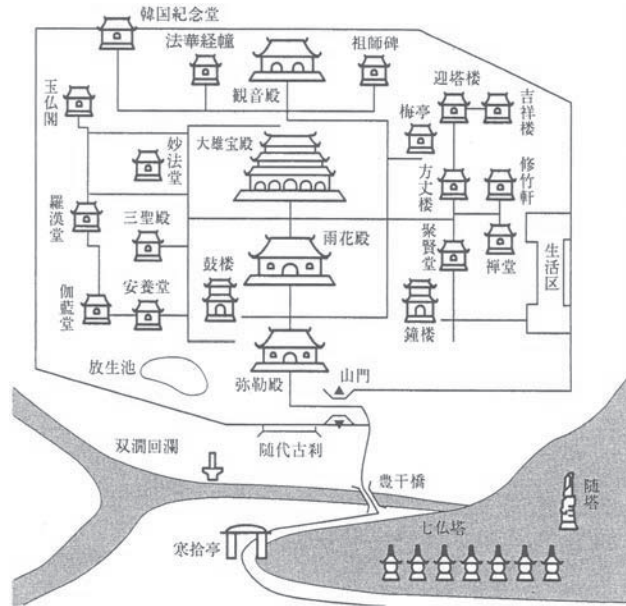
現在の堂宇の多くは清代雍正^{ようせい}12年(1734)に建てられたものである。「豊干橋」の名称は国清寺唐代の三賢(三賢堂)として有名な寒山、捨得に由来している。二人は豊干禪師に育てられ残飯をあさりながら仏教に帰依し奇行、狂人の伝説詩僧として有名である。宋代では多くの絵画の題材ともなり、日本でも北山文化期には五山・十刹の制の影響から禅の精神を具体化した素朴な水墨画は五山僧たちによって盛んに描かれている。

さて大小の円石を組んで懸けられている豊干橋を渡ると「隋代古刹」「教観総持」の黄色(柿色)照壁が目に入ってくる。ここが国清寺の正門(山門)である。隋代に創建され天台学の教観すべてが備わる寺院であることを表わしている。伽藍の主軸線にあたるすべての殿宇(正門、鐘楼、鼓楼、弥勒殿、雨花殿、大雄宝殿、両側の廂房^{ひさしぼう})が新しくなり、ここに300年余衰退していた国清寺はよみがえった。また正門前には天台八景の一つにもあげられている¹⁾双澗回瀾^{そうかんかいらん}である。殿宇は軒を連ねて35を数え境内総面積は4万1800平方メートルに及んでいる。仏像、仏具は荘厳され香火、梵音は絶えず天台山をして中国仏教天台宗の発祥の地であり古刹国清寺は天台宗の祖庭、総本山の風格を漂わせている。

なお、この時の大規模な重建については境内魚樂園放生池の端にある清高宗乾隆元年(1736)御製「国清寺碑文」詳しく刻まれている。

3) 現代の「国清寺」

天台山「国清寺」の開創や由来そして変遷について概略を述べてきたが最後に国清寺の現在について雑感も含めて付記しておく。前にも触れたが1960年代後半から約10年間にわたる文化大革命は結果的には人民を巻き込んだ肅清運動として展開され権力闘争、大量虐殺、内戦へとエスカレートしていき、国内は長期にわたる大混乱に陥った。これによって中国経済の停滞は勿論のこと多くの人材や文化財が喪失するに至った。加えて思想弾圧の余波は旧来の寺院や教会などの無秩序な破壊活動にも及び未曾有の被害を与えることになった。国清寺もこの動乱によって伽藍堂宇や仏像、仏典類の多くが灰燼となりまた僧侶



(図-3) 国清寺伽藍配置図



(図-4) 境内での行道

の強制還俗が行われるという法難にみまわれた。動乱後、国家は修復資金を支出し3年を経て清の復興以上の規模で見事に再興され、1983年には中国重点寺院の指定を受け現在に至っている。

さて国清寺の朝は早い。毎朝3時からの^{ごんぎょう}勤行は鐘と特大の木魚にあわせて約200人の修行僧による読経と五体投地にはじまり何度も繰り返される厳修の声は幽谷靈山に響きわたる。

2時間にもわたる大雄宝殿の朝勤からほどなく修行僧たちは続いて靄の立ちのぼる明け方の広い境内に出て灯籠や大木の周りを整然と一糸乱れることなくゆっくりと誦経と合掌礼拝の所作で歩行する行道勤修へと続いた。天地に祈る修行僧の念仏は全身で腹の底から絞りだされ、かすれてもおりまた一種リズムカルにさえ響きわたっている。この様相は靈山に棲む小鳥や草木の眠りを覚ますほどの壮観さを漂わせ時空を越えた仏天界を感得させるに充分でもある。私たち数名の日本僧もこの修行僧の行列に参入し念仏三昧を勤修できたことは貴重な体験でもあった。

ようやく行道が終わりに近づく頃にはうっすらと深山にも日が射しこみ広い境内には紫色の線香の煙が天空にまで充満していた。早朝からの勤行の疲労から老若修行僧たちの姿には一様に激しい吐息と一種の安堵感めいたものを感じることができた。修行僧たちの顔からは汗が流れており私の前で佇んで疲れを癒していた若い僧侶の袈裟が汗で滲んでいたのが特に印象に残っている。

これが1000余年もの間、緘黙として法灯を守り続けている国清寺の日課のはじまりである。

8. ゆかりの深い唐招提寺

本年5月の胡錦濤（フーチンタオ）国家主席の訪日は前任の江沢民以来10年ぶりの公式訪問であった。2007年4月の温家宝首相「氷を溶かす旅」に続いて「暖かい春の旅」とメディアも報じその目的を「相互信頼を増し未来を企画し戦略的互惠関係を推進すること」と位置づけた。そして「両国間の2000年以上にわたる交流の歴史が友好発展の基礎になっている。・・・」と繰り返し強調していることが目立った。

胡主席は訪日の最終日、ゆかりの深い唐招提寺や法隆寺の奈良古刹巡りを楽しまれた。ここでは本稿との関係で唐招提寺についてさらに若干の交流史を整理しておく。唐招提寺

は今から 1250 年前の天平宝字 3 年（759）に、日本伝戒の祖である唐の高僧鑑真によって創建された。この時鑑真はすでに 72 歳の老境に入っており毎日に健康状態が悪化し 4 年後の天平宝字 7 年 5 月、享年 76 歳をもって寺内で示寂された。これまでも述べてきたが鑑真渡日の影響はひとり天平期における我が国の仏教史にもたらした影響にとどまらず、悠久の時を越え両国における不動の友好交流の礎^{いしずえ}となっている。

さて、1972 年田中内閣時日中共同声明が発表されこれまでの不正常な状態に一応の終止符がうたれ日中国交正常化が実現した。その後、先の鄧小平副首相が 1978 年秋訪日され、この時鄧小平の承諾のもとで 1200 年ぶりに「鑑真和上」の里帰りが実現している。

（1980 年 4 月）中国側では「鑑真大師像回国巡展」として故郷揚州大明寺をはじめ北京の中国歴史博物館等で公開されている。当時中国は毛沢東による文化大革命により政治や経済の大混乱が大都市から地方にまで広がり寺院や文物の破壊がくり返され中国仏教界は瀕死の状況下でもあった。これら仏教界の混乱と退廃の中にあって「鑑真の里帰り」は旱天慈雨の救世主となり無言の大師像は中国人民に深い感銘と改めてその偉大さを認識させるものであった。

さらに昨年 4 月の温家宝首相の訪日時、演説の中で鑑真の功績に触れられたのがきっかけとなり揚州市から唐招提寺に「鑑真和上立像」（高さ 2.15 メートル）が寄贈されている。立像は晩年の柔和な面持の坐像とは対照的で船の上から航海の荒波に向って祈る躍動感あふれたものである。（鑑真再び海渡る）揚州大明寺能修住寺と唐招提寺の僧侶による合同法要がメディアで報じられたことは記憶に新しい。

そして今回の胡主席公式訪問の最終日は第 85 世松浦俊海長老の案内で唐招提寺御影堂安置の鑑真和上坐像の礼拝となった。この時にもまた胡主席から友好の証として唐代の遠洋航海船を模した「友誼之舟」（木製 長さ 1.5 メートル 高さ 0.55 メートル）が寄贈されている。胡主席は「唐招提寺や法隆寺は中日友好の証し、文化交流のシンボル」と評して 2000 年以上にわたる両国の交流史を奈良の古刹でも強調され帰国された。

「鑑真和上坐像」（国宝）は弟子の忍基が遷化近しことを覚り、入寂直前の崇高な姿を写し、多くの弟子たちによって造られたものである。慈愛にあふれ心眼は万象の奥を見ておられる感じが強く温顔は静かに語られる強い意志がみなぎっている様でもある。

注

- 1) 儀軌類：密教の儀式軌則である念誦、供養、曼荼羅などを記したもの
- 2) 三師七証：戒律を授ける三人の師僧（受業師、羯磨師、教授師）と証人となる七人の僧
- 3) 節刀：天皇が征夷大將軍、遣唐使などにその任のしるしとして与える刀
- 4) 具足戒：出家僧の守る戒律。男僧 250 戒、尼僧 348 戒
- 5) 玉泉寺：煬帝の援助によって天台大師智顛が創建。宋代盛時は荊州随一の名刹といわれ建康の棲霞寺、泰山の靈巖寺、天台の国清寺とあわせて天下四絶と称された
- 6) 牛頭禪：神秀の系統の北宗禪と慧可の南宗禪に対して建業（南京）の牛頭山で法融によってひろめられた（最澄は北宗禪の系譜をうける）
- 7) 双澗回瀾：二つの川が合流して流出。天台八景の一つ

参考文献

- 『聖地 天台山』 陳公余，野本覺成（佼成出版社）
- 『中国天台山諸寺院の研究』 齋藤忠（第一書房）
- 『日華文化交流史』 木宮泰彦（富山房）
- 『天台の流伝』 藤善眞澄，王勇（山川出版社）
- 『天台真盛宗 宗学汎論』 色井秀讓，他（百華苑 西教寺）
- 『天台真盛宗 読本』 色井秀讓（百華苑 西教寺）
- 『鑑真』 安藤更生（吉川弘文館）
- 『最澄』 田村晃祐（吉川弘文館）
- 『唐招提寺』 遠藤證圓（学生社）
- 『唐招提寺への道』 東山魁夷（新潮社）
- 『唐招提寺匠が挑む』 玉城妙子（小学館）
- 『天平の薨』 井上靖（新潮社）
- 『僧行賀の涙』 井上靖（新潮社）
- 『東大寺要録卷第二』
- 『大安寺史・史料』
- 『宝満山歴史散歩』 森弘子（葦書房）
- 『靈山寺と菩提僧正記念論集』
- 1) 「流沙を渡り来唐・来日した菩提僊那」 井上薫
 - 2) 「婆羅門菩提僧正とその周辺」 堀池春峰
- 『筑前国宝満山信仰史の研究』 太宰府天満宮文化研究所
- 『南さつま市坊津歴史資料センター』

